書物から時代を読む
――読書研究のすすめ――

若尾政希

はじめに――日記の一断章から

一九八九年一一月一日、午後。かねて手紙と電話で約束をとっていた川崎のN氏宅を訪れる。用件は安藤昌益に関する新史料について御教示いただくため。

昌益とは、高校の日本史の教科書にも「八戸の医者安藤昌益は『自然真営道』をあらわして、万人がみずから耕作して生活する自然の世を理想とし、武士が農民から収奪する社会や身分社会を否定し、封建制を批判した」[1]と特筆される思想家である。ハーバート・ノーマンの『忘れられた思想家――安藤昌益のこと――』[2]により、戦後よく知られるようになり、教科書にも載せられるようになったこの思想家の生涯は、実はまったく謎に包まれている。ここ二、三〇年ほどの間に、地域に密着した研究者による史料の掘り起こしにより、その生没年が元禄一六年（一七〇三）～宝暦一二年（一七六二）であること、秋田藩領出羽国秋田郡二井田村（現、秋田県大館市二井田）の上層農民の出身であること、生涯の一時期八戸藩領陸奥国三戸郡八戸町（現、青森県八戸市）で町医者をしていたという事実が、ようやく明らかにされてきている[3]のが現状である。

この年、群馬県草津のお医者さんが書いた本に、昌益の署名入りの書三枚と扁額二枚が紹介されたことから、まず八月三〇日に草津へ行き新史料発見の経緯について取材し、それらがいずれもN氏宅から出たものであることがわかり、訪問となったしだいである。何度か手紙を

応酬しようやく実現した訪問に、半ば興奮、半ば緊張しつつ、早速、Nさんへの聞き込みを開始した。くだんの史料は、Nさんの家（元M藩家老だという）に代々伝わった膨大な文書・書物の中から出てきたものであるという話から始まって、話題は医学・薬学・洋学・兵学・和算にまで広がり、（聞き込みとは名ばかりで）N老人の博学とうんちくに圧倒されてしまった。そうこうしているうちにNさんが「こんなものがありましたよ」と無雑作に投げて寄越された三枚の書に、目は釘付けになった。なんと昌益の署名入りの和歌二首と、昌益と山県大弐の漢詩がそこに記されていたのである。これらはいずれもまったく知られていない。特に、明和事件で死刑に処せられた大弐（享保一〇〈一七二五〉～明和四〈一七六七〉）と昌益が出会い気脈を通じていたことを示す漢詩史料は、従来の研究を根本から覆す大発見である。Nさんから「若いあなたが持っていた方がお役に立つでしょう。おみやげにあげましょう」とその文書を贈られ、六日の再訪を約し、夢心地でN氏宅を出たときには、すでに日は沈んで暗くなっていた。

どうやってこの史料の裏を取ろうかと考えながら、興奮冷めやらず、帰りの新幹線の中で、もらった史料を袋から出した。史料が出てきた時には、その真偽を他の史料から裏付ける必要があるのだ。昌益にも尊王的傾向があるから、その面ではつながるなあ等と思いながら、ふと指が「昌益」の印に触れた。すると、指にあざやかな朱が着くではないか。えっ、偽文書。二百数十年前の文書の印が乾いていないはずはない。ではこれは偽造されたものなのか。誰が何のために作ったのか。Nさん？あのおじいさんがそんなことをするだろうかと、次々と沸いてくる疑惑をなんとか押しつぶそうとしている自分に気がついた。

その後、六日、一八日と立て続けにN氏宅を訪問した。それは、とてもつらいものだった。信じたかった。しかし次から次へと昌益の新史料なるものを見せつけられ、しかもそれらが昌益の思想傾向とかけ離れたものであり、紙は古いが朱印は新しいとなると、やはり彼が偽造していると断定せざるを得なかった。「昌益の『自然真営道』の草稿を八千枚ほど持っている」、「四百年間の古書を所蔵している。日本の学者でないものはない」という老人の大言がそらぞらしく聞こえ、結局、この一八日が最後

の訪問となった。それでも吹っ切ることができず、翌日、数時間かけてNさんのご先祖が住んでいたという城にまで足を延ばし、今は中学校になっているその城跡にしばしたたずんで夕日を眺めていた。

一九九五年九月三〇日、近鉄南大阪線の上ノ太子駅を降り、途中で竹内街道歴史資料館に寄った後、めざす大ヶ塚に徒歩で向かった。大ヶ塚とは、『河内屋可正旧記』の著者、河内屋可正こと壺井五兵衛（寛永一三〈一六三六〉～正徳三〈一七一三〉）が住んだ河内国石川郡大ヶ塚村（現、大阪府南河内郡河南町大ヶ塚）である。可正は、当地で庄屋役を勤めた上層農民・大地主であり、酒造業を兼ねた商人であった。この可正が隠居後、元禄初年（一六八八）頃から宝永年間（一七〇四～一七一一）頃までに、子孫らへの教訓として書き留めたのが『可正旧記』である。一九五〇年に可正の子孫宅で発見され五五年に翻刻・刊行[4]された当書は、一八世紀初頭の庶民史料として注目されてきた[5]。

『新しい近世史』という講座に「幕藩制の成立と民衆の政治意識」という論稿を寄せることになった私は、この『可正旧記』を素材として、上層農民の政治意識の形成がいかに行われたか、という課題に取り組んでいた。活字の『可正旧記』を十分に読み込んだという自信はあり、それだけで論文は書けるとも思った。だが現地を踏んでいない私には、『可正旧記』の大部分を占める大ヶ塚やその周辺の地理・寺社・諸家等々の、いわばローカルな記述について、なんのイメージも実感も抱くことができなかった。こんな状態で果たして『可正旧記』を読んだといえるのか。『可正旧記』の原物も見ていないではないか。こうして、私は大ヶ塚に向かったのである。

富田林駅からバスが出ていることは知っていたが、地理・風土を理解するには歩くのが一番であるという考えから、上ノ太子駅から五万分の一の地図を頼りに歩くことにした。県道をまっすぐ南に下がればよいのだが、ダンプが排気ガスをもうもうとたてながら行き来する、歩道もない道を歩くのは骨が折れた。それでも小一時間ほどで大ヶ塚に着いた。こんもりした丘の上に広がった小さな町で、大ヶ塚御坊顕彰寺（可正当時は善念寺と称した）を中心とした寺内町である。南北を貫くメインストリートが途中で折れ見通しがきかず、防御的性格が強い

町であることを実感しつつ、町を一巡りした。近世には南河内で最も栄えた在郷町の一つだったというが、人通りは少なく清寂感が漂う。「右金剛山道」等と記した古い道標が道ばたにあり、道幅も車一台がようやく通ることができるほどであり、一瞬、近世にタイムスリップしたようで、可正が角から出てきそうな錯覚に襲われた。

ちょうどお昼を過ぎた頃であったので、さきに見つけておいた寿司店に入り、ちらし寿司を食べながら、お店の人に可正について尋ねた。「ああ、可正ですか。可正ならあの角を曲がったところ……」等という答えを期待していたのだが、返ってきたのは「知らない」の一言であった。本名の壺井五兵衛についても、同じであった。日本近世史の学界では可正は著名人であるので、当然地元の人々にもよく知られていると勝手思いこんでいた私は、今回の調査が難しいものであることを初めて思い知った。可正はいったいどこに住んでいたのか、また御子孫はどこにおられるのかについて私はなんの情報も持ち合わせていない。知り合いもいないし、なんのあてもない。落胆している私を気の毒がって、お店の人は、「お寺に行けばわかるかもしれない」といい、大念寺を紹介して下さった。お礼を述べて寿司店をあとにして、大念寺に向かった。大念寺でも、突然の訪問をお詫びしつつ、可正について尋ねると、「住職の代が替わったためよくわからない。このへんの旧家である土井さんなら御存知かもしれない」といわれた。拝観を終え大念寺を辞し、早速土井家を訪れた。御当主の土井良文氏は、突然の訪問にもかかわらず快く迎えいれて下さった。可正については「知らない」とのことであったが、「壺井さんならその先に家があった」と教えて下さった。現在、御子孫がどこにおられるかわからないとのことであったが、お墓は近くにあるということでお墓の場所を教えていただいた。また土井家は明治初年には大ヶ塚の戸長（村長）を勤めた家で、古い文書や書物も所蔵されているとのことで、今度見せてもらうことになった。土井家を辞し、夕方まで少し時間があったので、お墓参りをすることにした。大ヶ塚の丘から坂を下り、県道を横切り農道を歩いていくと、農作業をしている老人がいる。共同墓地の場所を尋ねがてら、思いきって「大ヶ塚に住んでおられた壺井さんを御存知ないですか」と尋ねた。すると、「壺井さんの娘さんが同級（学校）だった。この間同窓

会があって住所を調べた。確か……。」と教えてくださった。なんという好運だろう。なんたる偶然だろう。人に恵まれ、運に恵まれ、収穫の多い一日だった。

その後、この秋は、金剛山山腹の千早城跡や楠正成ゆかりの観心寺等の古跡を巡ったり、千早赤阪郷土資料館や富田林高校の菊水文庫等の史料調査をしたり、楠公さん（地元では正成を親愛と畏敬を込めてこう呼ぶ）を祭るだんじりが大ヶ塚の狭い坂道を上るのを目撃する等、南河内三昧で暮れていった。可正の御子孫にも連絡がとることができた。一一月二〇日には土井家の文書・書物を閲覧させていただいた。大ヶ塚の古地図、『可正旧記』の抜き書きや戸長時代の切り張り帳など貴重な史料がいくつもあった。土井さんには車を出していただき、やはり可正もゆかりの壺井八幡宮に連れていってもらい、宮司さんとお引き会わせいただくなど、とても有意義な時間を過ごさせてもらった。

＊　＊　＊　＊　＊

これは、日本近世史の研究者である私の研究のひとこまを、日記風に再現したものである。後者はとても楽しい思い出であり、いい人、いい史料に出会えたおかげで論文は完成し、『新しい近世史』巻五の一編として一九九六年に新人物往来社から刊行された。さらに九九年には、私の初めての単行著書『「太平記読み」の時代――近世政治思想史の構想――』（平凡社）の第三部にその成果を収めることができた。それに対して前者は苦い思い出であり調査はまったく徒労に終わり、なんの成果も生み出さなかった。できれば忘れたい事件をなぜここであげたかというと、調査・研究が必ずしも順調にいくとは限らないということ、「新史料」が出てきたとしてもそれを裏付ける作業がいかに大変であるかということを、この事件を通して肝に銘じたからである。

このような人と史料とのかけがえのない出会い、足で稼ぐフィールドワークが私の研究の基礎にあるのだが、「聞き込み」とか「裏をとる」等という言葉から、私が探偵小説の「探偵」気取りであることをおわかりいただけると思う。どんな些細な事実をも見逃さず謎を解いてみせるあの名探偵である。研究は探偵と似ているというのが私の持論である。探偵小説の最大の山場は謎解きである。そして研究もまた疑問を持ち、その謎を苦労しな

がら解くところに醍醐味がある。私が最初に取り憑かれた謎は、安藤昌益である。一八世紀半ばになぜ昌益のような思想家が出てきたのか、この謎に挑むことから私の研究は始まった。「昌益は、狩野亨吉が稿本『自然真営道』を掘り起こして（一八九九年前後）から今日にいたるまで、熱狂的ファンを惹きつけてきた。当代社会に対する批判的・変革的言辞や平等思想に注目があつまり、その伝記的事実や学問・思想形成の過程がまったくわからず謎であったことも手伝って、研究者が自己の思想的立場を昌益に投影する安易な研究がくりかえしおこなわれてきた。あるときは農本主義者に、また共産主義の革命家になったかと思えば、近年はエコロジストの先駆者にと、昌益はその相貌をころころと変えてきた。こうした昌益論（昌益像）はそれ自体、近現代の思想・思潮を探る史料ともなり興味深いのであるが、やはり昌益研究とは一線を画するべきであろう。昌益の研究は、昌益を讃美したり、時代からの超然性を喧伝することではなく、昌益の思想がいかなる歴史的社会的規定を受けて形成されたのかを解明することから開始されなければならない」[6]。ではどうしたらよいか。ここでは私の昌益研究の一端を述べて、謎解きの世界にご招待しよう。

一　安藤昌益の思想的基盤の発掘
――『太平記大全』の発見

昌益はすでに述べたように、経歴が不詳のため誰に師事して学問を学んだのかわからない。またどのような書物を読んで学問を学んだのかわからない。さらにその著作のなかで、昌益の高弟神山仙庵（八戸藩医）の言葉として「良中先生（昌益）……生まれて童壮に至るに、師を採らず書を学ばず」（稿本『自然真営道』巻二五）[7]と記し、既成の学問との継受関係を否定している。すなわち昌益と既成の学問・思想との継受関係は素朴な形ではなにひとつわからず、昌益はいわば孤立した思想家として我々の前に投げ出されているのである。ところが、当然のことながら昌益は読み書きの基本的な教育や多少の医術の手ほどきは受けたはずであり、いくつかの書物を読んだはずである。したがって、昌益がどこでどのような教育を受けたのかという伝記的事実の発掘作業を行うとともに、それと並行して、昌益が残した著作類の語句を詳細に分析することによって、昌益がどんな書物を読

んだのか確定していかなければならない。昌益の著作を見ると、昌益は儒学・仏教・神道・音韻学・医学・本草学等々の既成の諸学問を厳しく非難・否定しており、昌益はそれらの諸学問についてなにがしかの知識をもっているのである。どうやってその知識を入手したのか、昌益自身はほとんど語っていないものの、何らかの情報源があったはずである。そこで昌益の表現の一言一句に注目して、それを昌益が見ることが可能であった（昌益と同時代あるいは前代の）書物と比較対照する作業を根気強く積み重ねることによって、昌益が確かに読んだ書物を明らかにできる。昌益の読書歴を解明できれば、昌益がその書物から何を学んだのか、何を継承し何を否定していったのかという昌益の思想形成の過程を考察することができるのである。

このようにして私は、これまでに、稿本『自然真営道』・刊本『自然真営道』・『統道真伝』や『暦大意』等を分析対象にして、医書『類経』、西川如見著『教童暦談』等が昌益の学問・思想形成に決定的な影響を与えたこと、それらが昌益の思想を生み出しその母胎となった思想的基盤であることを明らかにしてきた。そのような基礎的作業をしているときに出会ったのが、昌益の高弟神山仙庵の子孫の家に伝えられた『博聞抜粋』[8]である。三冊の写本からなり『釈氏篇』は仏教関係の記事を収め、『〈無題〉』（表題部分が欠落）は日本神話関係、『雑之条』は儒教その他の記事を収載している。引用された書名を挙げれば、『貞観政要』『綱鑑紀要』『列子』『祖庭事苑』『蒙求』『韻会』『抱朴志』『文選』『淮南子』『尚書』『史記』『白氏文集』『五燈会元』『貞元録』『大知度論』『圓覚経』『碧厳録』『新訳仁王経』『大梵天王問仏決疑経』『日本紀纂疏』……等と多い。そのジャンルも儒学・仏教・神道・歴史・文学と幅広く、まさに「博聞」の名にふさわしい内容となっている。この史料と出会った私は、大きな謎――『博聞抜粋』の編者は豊富な読書歴をもち蔵書を形成しているようであるが、果たして昌益なのかという謎――を突きつけられたのである。そこで私は『博聞抜粋』の各条の典拠を一つひとつ調査することにした。その結果、次のような事実が明らかとなった。[9]

（1）そのほとんどは原典からの直接の引用ではなく、『太平記大全』という一つの書物からの又引きであり、『博聞抜粋』は『太平記大全』の抜粋集であった。

（2） 編者の名は記載されていないが、「正信云」「正信自釈」などとコメントを付している条がいくつかあることから、正信なる人物が、『太平記大全』を読み進めながら、分野ごとに三冊のノートに分けて抜粋し、ときに自己の見解を述べて編集したと推定される。

（3） この正信は――『博聞抜粋』と同時に発見された確龍堂正信著『暦大意』と同主旨の発言をしていることから――確龍堂正信と同一人物であり、したがって昌益その人だと推定できる（主著『自然真営道』等では確龍堂良中というペンネームを用いている）。

（4） 作成時期は『暦大意』（延享二年〈一七四五〉）と同じ頃か、少し前と推定される。

以上、要するに、昌益は思想形成の過程で（確龍堂正信と名乗っていた時期に）『太平記大全』を読んでいた。しかも通読ではなく、その一部を抜き書きし『博聞抜粋』を編むほど読み込んでいた。では、『太平記大全』とは、いったいどのような書物だろうか。

『太平記大全』は、万治二年（一六五九）刊行の奥付をもつ五十冊もの大部の書物であり、構成は、『太平記』本文、挿絵・〈鈔〉・〈評〉・〈伝記〉からなる。『太平記』とは、いうまでもなく、鎌倉幕府滅亡から南北朝動乱期を描いた軍記物語である。この本文（流布本系）に挿絵を付し、次の〈鈔〉には、『太平記』の語句の本格的注釈書『太平記鈔』を収録し、〈評〉には、『太平記評判秘伝理尽鈔』（以下『理尽鈔』と略称）という書物の全文を収録し、最後の〈伝記〉には登場人物の略伝を載せた。この書物から、昌益は儒学・仏教・神道・歴史・文学等の知識を得ていた。そして『太平記大全』を源泉（ソース）とする知識は、稿本『自然真営道』らの主著にも確かに生かされている。さらに重要なのは、『太平記大全』の〈評〉の政治思想と昌益との関連である。一例を挙げよう。よく知られているように、昌益は「（聖人は）上に立ちて帝王と為り、五常・五倫・四民の事を立て、天下を治め民を慈しみ種種の教ひを為すこと、（中略）皆な己を利し推して上に立ち栄花を為す私制の法言にして、其の実は天道を盗みて不耕にして衆人の直耕を貪り食ひ（下略）」（稿本『自然真営道』巻六、傍点筆者）と述べ、聖人による五常・五倫・四民の制度の樹立、民への教化・教導の活動は、聖人自身が民の上に立って栄華を極めんがために行ったことだという。「衆に敬（うやまは）れんが為に」

（刊本『自然真営道』巻二）、聖人が作成したものが儒学であり、釈迦も、「寛楽を求めんが為」（稿本『自然真営道』巻十）に仏教を創始したのだと、昌益はその功利性・イデオロギー性を暴露している。注目すべきことに、『太平記大全』巻二四〈評〉にも次のようにある。(10)

先震旦ノ聖人共ノ五常ノ道ヲ立ル事、諸人ヲ安穏ニセンカ為也。其根本ハ我レ能世ヲ渡ラント思フ所ニ有リ。諸人我カ謂信スル則ハ、国不レ乱、五常不レ乱則ハ、国難ナシ。民和ニホコレリ。其時ハ我レハ師ト被レ謂諸人ニ崇敬セラル、物ニ候。崇敬ノ一ヲ目ニ懸テ、諸人ニ道ヲ進ル事、賊也。人ノ為ニ非ス。仏ケ法ヲ説給フモ三界ノ導師ト成ラン為也。此賊也。

驚くべきことに、聖人と「仏け」（釈迦）を「賊」呼ばわりしている。聖人が五常の道を立て人々に教えたのは、表向きは「諸人を安穏にせんが為」であるが、根本（内実）は聖人自身がうまく「世を渡らんと思ふ所に有」る。人々が聖人の教えを信ずれば、治国安民が実現され、聖人は「師と謂はれて諸人に崇敬せら」れる。聖人の教導は、「人の為」ではなく、自身が人々に崇敬されて世渡りするためであり、聖人は賊なのである。同様の理由で、釈迦が仏教を説いたのも導師として世渡りするためであり、釈迦も賊だという。この論法はまさしく昌益と同じである。実は昌益はこの箇所を『博聞抜粋』に抜粋しており、これまでの研究では昌益独自と見なされてきた昌益のイデオロギー暴露は、『太平記大全』〈評〉を承けたものだったのである。

こうして『太平記大全』が昌益の学問・思想形成に決定的な影響を与えた、昌益の思想形成に欠くことができない最も重要な思想的基盤の一つであることが明らかとなった。では昌益の思想を深く刻印づけた『太平記大全』、特にその根幹部分にあたる『理尽鈔』とは近世日本においてどのような意義をもった書物なのか。『理尽鈔』の歴史的意義を解明すべく、私は『理尽鈔』研究に足を踏みいれたのである。

二　「太平記読み」の発掘
――領主・思想家の「太平記読み」受容

『理尽鈔』はどのような書物か。この課題に取り組み始めた私は、まず研究史を調べ、亀田純一郎氏の古典的論文「太平記読について」[11]に行き着いた。『太平記』は口誦による「読み」という形で享受されたが、一口に『太平記』読みといっても、たんに本文そのものを読むものと、本文に批判・評論を加えつつ講釈をするものの二種あること、そのうち近世初期に武士層を対象にして盛んに行われたのは後者であり、この講釈のネタ本がほかならぬ『理尽鈔』であったことを、この論文から教えられた。しかし、亀田氏がこの『理尽鈔』を、「その説き且つ論ずるところ、末節に拘泥し陳腐に流れ、読むに堪へないものが多い。従つてかゝる書を読み、或は進んでその講釈を聞き伝授を受けたところの当時の武人の心理状態が疑はれるのである」と酷評したことも手伝って、『理尽鈔』の思想内容を分析した研究がこれまでまったく行われてこなかったこともわかった。果たしてそんな陳腐なものだろうか。だとしたらそんな書物に大きな影響を受けた昌益ってなんだろうと思いながら、半信半疑で『理尽鈔』を読み始めた。

『理尽鈔』は、日本文学研究者の加美宏氏が指摘しているように、「『太平記』流布本系の、全四六一章段のうち、約九割にあたる四一九章段を採りあげ、そこに描かれた事件・合戦・人物などにつき、「評云」あるいは「伝云」といった形で、論評や補説を加えたものからなっている。「評」は、兵法・軍略と倫理にかかわる論評を主としており、「伝」は、『太平記』本文には載せられていない異伝・秘話の類をかかげている」[12]。よって『理尽鈔』を読むにはまず『太平記』を読まなくてはならない。長編の『太平記』を読んだ上でさらにその数倍の長さの『理尽鈔』を読むことは正直いって骨が折れた。しかも各章段の事件・合戦・人物等へのコメントであるため、まとまった意見・思想を開陳するといったものとはほど遠く、断片的で、『理尽鈔』の作者が何をいいたいかを体系的に把握することは、なかなかできなかった。それでも辛抱強く約二ヶ月かけて『理尽鈔』を読み通すことによって、私は、『理尽鈔』により『太平記』とは異なる新たな楠正成像が提起されていることを発見した。

いうまでもなく正成（？～建武三〈一三三六〉）とは、『太平記』中の最大のヒーローであり、そこでは後醍醐に忠誠を尽くした武将、智謀あふれる軍略家として描かれている。ところが『理尽鈔』の正成は、たんなる軍略家ではない。ここでは正成は領民に仁政を施してその信服を得るといった農業政策に精通し、また家臣に対しても硬軟両様を使い分けて家臣の信服を得て彼らを自由に使いこなす、卓越した政治能力をもつ指導者「明君」であった。『理尽鈔』[13]はその「奥書」で「太平記之評判者、武略之要術、治国之道也」（巻四〇）と述べ、講釈の主題が武略と治国（政治）とにあると述べているが、正成は、まさにこの双方を教諭する指導者の任を担わされているのである。『理尽鈔』は成立過程も作者もはっきりとはわからない。法華宗（日蓮宗）の僧侶大運院陽翁（一説には永禄三〈一五六〇〉～元和八〈一六二二〉）がその講釈を始めたのは、慶長の末から元和にかけての時期だと推定される。元和偃武（げんなえんぶ）の言葉が端的に示すように、この時期は戦国の世から平和な世への変わり目であり、武士たちもそれに対応した変化を余儀なくさせられた時代であった。家臣・領民との軋轢を起こすことなく彼らをうまく掌握し領内を統治する政治能力が武士たちに求められるようになったのである。『太平記』から『理尽鈔』へ――正成はたんなる軍略家から政治・軍事両面の指導者へと大きくイメージチェンジした。この正成像の転換は、あるべき武士像が転換したことを象徴的に示しているといえる。武士たちを『理尽鈔』講釈に引きつけた要因の一つは、この点にあったのではないかという確信を、私は得るに至った。

こうした『理尽鈔』の解読・分析と同時に、私は、日本全国に散在する、『理尽鈔』講釈に関連する史料を掘り起こす作業を開始した。八〇年代末から九〇年代末までに、北は北海道の札幌、南は九州の島原まで（足を踏み入れた都道府県はちょうど三〇に上る）史料調査に訪れ、史料所蔵機関・所蔵者の方々のお世話になり、新たな史料を多く発掘できた。この二つの作業はいずれも継続中であるが、ひとまずこれまでの成果をまとめて中間報告として出したのが、前掲の『「太平記読み」の時代』である。「太平記読み」とは、『理尽鈔』の講釈及び講釈師を、私が仮に「　」に入れて呼んだものである。私は、『理尽鈔』が作成された（と推定される）戦国末から昌

益が生きた一八世紀半ば、宝暦・天明期までを一括りにして「太平記読み」の時代ということができるのではと考えた。なぜそういえるのか。詳しくは拙著によっていただきたいが、以下その概略を述べよう。

『理尽鈔』講釈は、もともとは、その祖師と伝えられる大運院陽翁やその弟子が行う講釈を、厳粛な態度で受講・伝受するものであった。その広がりについては、今後の調査をまたねばならないが、研究の現段階では、金沢藩の藩主（前田利常・光高）・重臣（本多政重・前田貞里ら）や岡山藩の藩主池田光政、幕閣の板倉重宗・稲葉正則らが『理尽鈔』講釈と深くかかわったのは確実である。一例として池田光政（慶長一四〈一六〇九〉～天和二〈八二〉）について述べよう。光政の政治及び政治思想については、従来、熊沢蕃山（元和五〈一六一九〉～元禄四〈九一〉）とのかかわりのみが注目され、儒学がそのバックボーンをなすといわれてきた。ところが、光政は、『理尽鈔』の講釈師横井養元（天正六〈一五七八〉～寛文七〈一六六七〉、藩医二五〇石）を抱えており、『光政公御筆御軍書』（『理尽鈔』からの抜粋集）や『恩地左近太郎聞書』（『理尽鈔』といっしょに伝来する書物で、『理尽鈔』の政治論を踏襲敷衍したもの）を書写し、しかもその言動からは「太平記読み」の影響を確かにうかがうことができる。仁政思想、私欲の禁止といった政治の理念的側面から、評定制の導入、評定制と君主直仕置きの両立といった政治制度とその運用の側面、さらには光政が折に触れて行う家臣教諭の一言一言までもが、その多くを「太平記読み」に負っていた。例えば、蕃山との仲が険悪になった寛文末年頃に、蕃山の言動にまどわされないように重臣に教諭した一文のなかで、「只今ノ仕置我等作意にて無之候。楠正成ノ仕置にて候」（「御書付」）と、評定制を根幹とした政治は、正成の政治を模範としたのだと発言している。先にも述べたように、『太平記』では、正成は、後醍醐に忠誠を尽くす武将、智謀あふれる武将であって、決して模範的な「仕置」を行う為政者として正成は描かれない。このような正成が登場するのは、ほかならぬ『理尽鈔』・『恩地左近太郎聞書』である。光政のこの発言から、光政が「太平記読み」が造型した「明君」＝正成像を継承して、それを模範として政治を行ったことがわかるのである。このように岡山藩における光政による藩制、支配のしくみの

確立に、『理尽鈔』の政治論は大きな影響を与えた。岡山藩の藩政改革は、研究史上、寛永末年の全国的飢饉を契機とした支配体制の危機を打開するための初期藩政改革の典型として挙げられてきた。これに『理尽鈔』講釈が関与したのである。近世初期の領主層は、現実の政治の場で、家臣・領民との葛藤の中で、いわば試行錯誤で政治のあり方を模索する、そうした場にいやおうなく投げ込まれた。このような先の見えない混沌とした時代において、政治の理念なり具体策なりをわかりやすく教える「太平記読み」がもてはやされたと推定されるのである。

さて、『理尽鈔』は、本来、繰り返し講釈を受けいわば免許皆伝の証（あかし）にようやく書写を許されるものであった。ところが、今日、各所に残される『理尽鈔』の写本を見ると、陽翁が唐津藩主寺沢広高（永禄六〈一五六三〉～寛永一〇〈一六三三〉）に伝授した旨を記す伝受証文を末尾に付けた寺沢本『理尽鈔』の書写本がいくつも残されている。これは寺沢本が講釈の伝受を要件とすることなく書写されたことを示しており、（もちろんその写本を閲覧できる層は限られているとはいえ）より多くの人々がそれを享受できるようになったのは確かであろう。さらに、この寺沢本は――その経緯は未詳であるが――一七世紀に日本史上初めて登場した出版業者の手に渡り、一七世紀半ばには、寺沢広高の伝授証文を付けたまま出版された。これにより、その享受層は飛躍的に拡大した。厳粛な対面口承による伝授を経ることなく、不特定多数のものが書物を読むこと、すなわち〈読書〉を通して、その「秘伝」を享受できるようになったのである。たとえば、山鹿素行は、『日記』に「今夜読二理尽抄第二十五一」（承応一年〈一六五二〉正月十日）と『理尽鈔』を読んだことを書き記している。素行はたんに読んだだけでなく、『理尽鈔』からの抜粋ノート『理尽抄抜萃』（万治二年〈一六五九〉四月五日）まで作成し、さらに『山鹿語類』にもそれをふんだんに引用・利用している。こうして素行は、「太平記読み」が造型した「明君」＝正成像を受容しており、素行の学問・思想形成に「太平記読み」は大きな影響を与えたのである。この素行の事例が端的に示しているように、一七世紀初めに「太平記読み」により提起された新たな指導者像（「明君」＝正成像）は、山鹿素行や熊沢蕃山といった当代の著名な学

者までをも巻き込みながら、一七世紀の思想界を席巻し、一般（常識）化していったのである。

三 「太平記読み」の読書
――民衆の「太平記読み」受容

「太平記読み」はそのネタ本の刊行により、大きな変化を余儀なくさせられた。一七世紀の前半には、読み聞かせという口誦による知（知識・知恵）、オーラルなメディア（情報媒体）による知であった『理尽鈔』講釈が、一七世紀後半には書物による知、出版メディアによる知へと大きく変質させられた。その享受層も、前者では口誦の場を共有した限られた人々、よって特権的な階層の人々（上層武士）を対象としたのに対し、後者は、「都鄙貴賤此書（『理尽鈔』）ヲ信ジ、世挙テ好ミ用ル故ニ、又事ヲ好ム者大全綱目ナンド、名付ケ、此書ニ大部ノ末書ヲ重ネ」[14]と、『太平記大全』（昌益はこれを読んだ）・『太平記綱目』等という末書も作られ、地域・身分を越えた広い層に受容されていった。そしてこのような『理尽鈔』物の流行を受けて、一七世紀末には民衆を対象とした大道芸能者太平記読が登場し、辻講釈の盛行を迎えるのである。

ところで、本来武士層を対象とした「太平記読み」が、なぜ地域・身分を越えてもてはやされたのであろうか。政治論・軍事論を要とする「太平記読み」は、民衆にとってどのような意味があったのか。前述の河内屋可正が書きつづった『可正旧記』は、それを考える際の絶好の史料の一つである。『可正旧記』を詳細に分析すると、これまでまったく指摘されてこなかったが、可正は『理尽鈔』やその関連書（例えば安藤掃雲軒著『南木武経』等）を通して、「明君」＝正成像を受容していた。「我等ごときの庶人」（「序」）と自称する可正にとって、「太平記読み」は何であったのかというと、可正は、まず、「家をとゝのへ、身を治、心をたゞしうするよすがにせん」と、それを民の修身（自己形成）と斉家（家をととのえ治めること）の論に読みかえ、子孫への教訓を展開している。と同時に、可正は、郷村の民を治める指導者として強い自覚を持ち、受容した「明君」＝正成像を自らのものとして、あるべき村役人像と仕置きのあり方を説いている。「太平記読み」の政治論は領主層だけでなく、村役人層まで、いわば下降化し、その結果、武士層

から民衆の上層までに、共通の指導者像が形成・定着したといえるのである。さらに『可正旧記』によれば、可正は「人々集りて夜話の折」に「軍書を引て和漢両朝の名将勇士のはたらき」から「仏法（中略）、其外神道・歌道・荘老孔孟のをしへ迄、取集めて」講釈をしていた。民衆の間に、村の読書人を中心にして、その「読み」「語り」を聞く場が形成されており、出版メディアによる知は、そうした村に形成されたオーラルなメディアを介し、中下層農民へと流通していった可能性もある。つまり「太平記読み」の政治論は正成像というわかりやすいかたちで、もともとの対象であった武士層を越えて、思想家や民衆にまで大きな影響を与え、指導者像や政治のあり方に関する社会の共通認識（常識）の形成に寄与したと推定されるのである。

そして安藤昌益もまた、『太平記大全』の読書により「太平記読み」の政治思想を受容していた。一介の庶民である昌益が幕藩制国家・社会の矛盾を鋭く衝いた社会批判を行うことができたのも、「太平記読み」を通して現実の幕藩制国家の支配のカラクリを理解していたからこそ可能だったということができよう。

昌益の社会批判は、「太平記読み」によって形成された常識の破綻を、いちはやく告発したものである。昌益が登場した一八世紀半ば、宝暦・天明期は、研究史上「幕藩制国家解体の起点」（たとえば一九六五年度歴史学研究会近世史部会「維新変革の起点――宝暦・天明期の諸問題」『歴史学研究』三〇四参照）と位置づけられる、日本近世の転換点であり、そのような時代に昌益が登場したことは象徴的である。私が『「太平記読み」の時代』の終章に昌益を位置づけた所以（ゆえん）である。

むすびにかえて

私は、『「太平記読み」の時代』において、「太平記読み」を基軸にすえることによって、武士層や思想家の政治思想から民衆の政治意識・思想までを歴史的かつ総合的に把握することが、はじめて可能となったとして、「太平記読み」を基軸とした近世政治思想史の構想を提起した。この構想は、以上の叙述から明らかなように、昌益はどんな書物を読んだのかという、一見些末な謎解きから始まった。まさしく「事実は小説よりも奇なり」で、人・史料との出会いにも恵まれて、思ってもみない

成果をうむことができたのである。

ところで私がこのような研究に没頭していた一九九〇年代は、くしくも近世史研究において書物に着目した新たな研究動向が現れた時代であった。これまでの研究では、主として支配のラインにのって作成される手書きの文書史料から歴史を再構成してきた。各地で史料調査が行われ、文書の整理、目録の作成、史料の保存がなされてきたが、そこでは文書史料のみが重視され、書物はながらく、目録の「雑」の部に入れられ分析の対象となってこなかった。ところが九〇年代に入ると書物に光があてられ、書物に着目して書物を史料として（書物史料から）近世史を語ろうとする研究が出てきたのである。たとえば阪神淡路の大地震後の史料救済活動の中で、庶民が膨大な蔵書を持つことに新鮮な驚きを感じた横田冬彦氏は、畿内をフィールドにした蔵書調査から、一七〇〇年前後には畿内村落において知的読者層が成立していること、そして近世の政治支配はそのような在地社会の知の水準を踏まえた上での支配であったという刺激的な論点を提起した。[15] また「古文書返却の旅」[16]で、能登時国家（ときくに）の膨大な蔵書の整理に直面した橋川俊忠氏は、奥能登や関東をフィールドに蔵書の掘り起こしを行い、家・地域の総合的調査研究に蔵書研究が重要な位置を占めるという問題提起を行うとともに、「戸数三百ほどの村に、これほどの教養人がいたという事実をどう考えたらよいのだろうか。近世の「地方」は、現在（中略）よりもはるかに知的水準が高かったように思われるが、いかがであろうか」と述べている。[17]

そして私の安藤昌益・「太平記読み」研究も、そのような研究動向の一翼を担ったものと研究史上に位置づけることができよう。昌益に限らず、ある人物が書物をどのように読んだかという観点からの研究を進めることによって、ある人物の意識・思想形成過程を追うことができ、その人物を歴史・社会のなかに位置づけることがはじめて可能となるのである。

なお、いうまでもないことであるが、これは決して他人事ではない。我々自身も意識・思想形成の途上にあり、どんな人・書物と出会い、またどのような蔵書を形成するのかという問題は、現代の我々自身の切実な問題でもある。もし未来の歴史家が、「二〇世紀末から二一世紀初頭における〈知〉」を問題にしたとき、それはどのよ

うに位置づけられるのであろうか。あなたのノートを歴史家が入手したとして、そこから彼はどのような結論を導き出すのであろうか。

それはともかくとして、いま、読書・書物研究は、もっとも刺激的な研究分野の一つである。①読者の蔵書形成、②読者の獲得した「知」と在地社会、③読者の読書遍歴と意識・思想形成（読者が作者になるという問題）、④読書と芸能者（口誦芸能、太平記読み、講釈師）、⑤本屋と貸本屋、⑥写本と版本、⑦権力と本屋（出版統制）、⑧作者と書物……等々。いずれもほとんど手つかずの沃野が我々の前に広がっており、我々が鍬を入れるのを待ち望んでいるのである。さあ、発掘・謎解きの旅に出掛けよう。

（1）『詳説日本史』山川出版社、一九九八年版。

（2）E・H・ノーマン著大窪愿二訳、上・下巻、岩波新書、一九五〇。

（3）『安藤昌益全集』巻十・関係資料（三宅正彦・野田健次郎編、校倉書房、一九九一）は、近年の掘り起こしの成果を網羅している。

（4）野村豊・由井喜太郎編『河内屋可正旧記（近世庶民史料）』清文堂出版、一九五五。

（5）たとえば安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、一九七四、のち平凡社ライブラリー、一九九九）、高尾一彦『近世の庶民文化』（岩波書店、一九六八）等。

（6）若尾政希執筆「安藤昌益」より抜粋（『民間学事典人名篇』三省堂、一九九七）。

（7）稿本『自然真営道』は東京大学総合図書館所蔵の原本を、巻一〇は八戸市立八戸図書館所蔵（上杉修旧蔵）の写本を、刊本『自然真営道』は八戸図書館所蔵（もと村上寿秋氏所管）の初刷本を使用することとする。また昌益の著作からの引用は、現行の字体を用いた書き下し文により行う。

（8）上杉修氏発掘旧蔵、現在八戸図書館所蔵。

（9）詳細は、若尾政希「延享期安藤昌益の思想――『博聞抜粋』の基礎的研究――」（『日本文化研究所研究報告』第二八集、一九九二）を参照されたい。

（10）『太平記大全』は、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本より引用する。

（11）『国語と国文学』八―一〇、一九三一。

（12）加美宏「『太平記評判秘伝理尽鈔』をめぐって」（『日本文学』三四三、一九八二、のち『太平記享受史論考』桜楓社、一九八五に所収）。

（13）『理尽鈔』は、高知県立図書館山内文庫所蔵（国文学研究資料館のマイクロフィルム）の刊本より引用する。

（14）小林正甫編『重編応仁記』宝永三年（一七〇六）発題、

狩野文庫所蔵。

(15) 横田冬彦「益軒本の読者」(横山俊夫編『貝原益軒』平凡社、一九九五)、「近世村落社会における〈知〉の問題」(『ヒストリア』一五九、一九九八)他。

(16) 網野善彦『古文書返却の旅』中公新書、一九九九。

(17) 橋川俊忠「在村残存書籍調査の方法と課題」(『歴史と民俗』四、一九八九)、「近世文人・名望家の教養」(同一〇、一九九三)他。なお、他に重要な研究として、藤實久美子「書籍史料の特性と調査方法について」(『学習院大学史料館紀要』八、一九九五)、同『武鑑出版と近世社会』(東洋書林、一九九九)、小林文雄「近世後期における「蔵書の家」の社会的機能について」(『歴史』七六、一九九一)、中子裕子「無足人の読書と文芸」(『奈良歴史研究』四八、一九九八)等がある。

(一橋大学助教授)